

# ノールデンシエルドが日本で蒐集した 本草図書の考察

上野 益三

## 序 節

ヨーロッパの近代生物科学が、日本の斯学に及ぼした影響を研究するには、およそ四つの方法がある。その一は、日本における西洋生物学の移入の方法とその理解、<sup>1)\*</sup> その二は海外の学者が日本の生物科学をどう理解し、またどう評価したかを知ることである。その第三は、日本で蒐集して海外に存する日本の生物科学関係図書を研究することであって、これは第二の点を明かにするためにも、必要な手段である。第四は同時代のヨーロッパの生物科学の進歩と日本の斯学との比較研究で、これによって彼我の相違を知り、わが生物科学の19世紀末までの後進性の本質が明かになると思われる。この小篇では、第三の方法の一つの試みとして、ノールデンシエルドが明治12年(1879)に、日本で蒐集した図書の目録<sup>2)</sup> 中から、生物科学に関するものとして、本草書目を取り上げて校訂し、かつ若干の考察を施した。

ノールデンシエルドが図書を蒐集した明治12年当時の日本は、東京大学理学部(後の帝国大学理科大学)に生物学科が創設せられてから、わずか2年の後であった。国内で純粋生物学的な著書の刊行されたものは、十指の上に出ていなかった。<sup>3)</sup> しかも、それらは程度の低い初歩的なものに過ぎず、東京その他の都市で入手できた図書の大部分は、幕末までに出版されたものであった。このことは、ノールデンシエルドの蒐集書目から容易に看取することができる。しかも、それらの図書は、いずれも植物学や動物学が独立の

\*本篇末尾の註参照。以下同様。

科学として、日本でまだその地歩を固めていなかった時代のものである。その大部分が、いわば博物学書というにふさわしいものである。

19世紀の中ごろまでの日本の生物科学であった博物学は、一般に本草学といわれ、その応用方面は物産学と呼ばれた。本草学の中には、この学問の本道である薬物学、筆者のいう狭義の本草学としての内容のものがある。ノールデンシエルドの書目では、本草と題する図書の、あるものは博物の項に、あるものは薬物（医学の項である）に分類してあるけれども、それは必ずしも明確ではなく、中にはその区別のむつかしいものさえある。その分類についての筆者の私見は後節で述べる。

この書目を見てわかることは、その蒐集が広く日本の図書全般にわたっていて、生物科学に関するものは、その一小部分をなすに過ぎない。しかし、明治12年当時どのような本草図書が世に行われ、また過去に遡って、どのような古い本草図書が入手可能であったかがわかって、すこぶる興味がある。そこに載せられた図書の大部分が、現在では稀覯となり、公私の図書館所蔵本は別として、古書市場等に現れることが極めて少なく、価数万金をもっても入手できないものが少なくないのである。

## 1 蒐書の由来

ノールデンシエルド(Nils Adolf Erik NORDENSKJÖLD)は、蒐書の目的で日本に来たのではない。スウェーデンの北氷洋探検船ウェーガ号(“Vega”)を指揮し、その北氷洋東航に成功し、ベーリング海を南下して横浜に入港したのである。<sup>4,5,6)</sup> その日本滞在2カ月近い期間に図書を集めた。その滞日中の足跡から想像して、主として東京および京都、特に東京でその目的を果たしたと思われる。<sup>\*\*</sup>

ノールデンシエルドは1832年(わが天保3年)11月18日、フィンランドのヘルシンキに生まれた。同地の大学卒業後スウェーデンに渡り、ストックホルムの王立博物館に就職し、後にその地質学部長となった。彼の後年の名声は、

<sup>\*\*</sup>この点については、本篇末尾の附記参照。

地質学者としてよりも、むしろ北極地方の探検家として高い。1858年以降、スピッツベルゲン、グリーンランド等へ数回探検を試み、北緯 $81^{\circ}42'$ という高緯度の地点まで到達するのに成功した。ウェーガ号の壮挙は、シベリアの北岸沿いに北氷洋東進の可能性を実証するため、1878年7月4日、スウェーデンのヨーテボリ港を出帆し、ノルウェーの西海岸を北上し、北氷洋横断の壮途についた。しかし、9月28日、北緯 $67^{\circ}$ 、西経 $174^{\circ}$ のピトレカイまで達したとき、船が氷に閉ざされて進路を阻まれ、翌1879年7月18日まで294日間、結氷中にとどまった。やがて脱出に成功したウェーガ号は、7月19日、アジアの東端デシユネフ岬を廻り、20日には早くもベーリング海峡を通過して、アラスカのポートクラレンスに入港した。横浜に入ったのは明治12年(1879)9月2日夕であった。ウェーガ号は北氷捕鯨船を改造した357総トンの汽帆船である。10月27日、2カ月近い滞日を終え、横浜を出帆、インド洋を西航し、1880年(明治13)4月24日、ストックホルムに帰航した。ウェーガ号の壮挙を成功に導いたその指揮者ノールデンシェルドが没したのは、1901年(明治34)8月2日、南スウェーデンのルンド郊外であった。

ノールデンシェルドが日本滞在中蒐集した図書は、ストックホルムの王立図書館に所蔵せられ、フランスの学者ロニが編集した1巻の目録(後出)によって、その内容を知ることができる。筆者が本篇をつくるのに用いたのはこの目録である。そこに収載された日本図書は1879部で、12類に分けてある。ロニ(Léon Louis Lucien Prunol de Rosny)は、1837年8月5日の生まれで1916年に没した。東洋学者で民族学を兼修し、日本語、中国語の造詣が深く、中国日本に関する多くの論著を発表している。

## 2 目録に収載された本草圖書とその分類

ロニが編集した上記目録は、「ノールデンシェルド日本文庫目録」と題し、そのフルタイトルは次の如くである。

Bibliothèque Royale de Stockholm, / Catalogue / de la / Bibliothèque Japonaise / de Nordenskiöld, / Coordinné, Revu, Annoté et Publié / par

Léon de Rosny, / Professor à l'École Spéciale des Langues Orientales, / et Précédé d'une Introduction / par le Marquis d'Harvey de Saint-Denys, / Membre de l'Institut, Professor au Collège de France. / Paris. / Imprimé par Autorisation de M. le Garde des Sceaux / à l'Imprimerie Nationale. / M DCCC LXXXIII.

これは1883年(明治16)パリでの刊行で、med. 8vo版、全篇360ページで、そのうちに索引が85ページを占めている。目録中の書名には、あまり出来のよくない漢字の活字を併用している。

筆者が今問題にしている図書のほとんど大部分は、ロニの目録の第四部自然科学の中に入っている。今、その書名のみを抽出列記すると次の如くである(原綴のまま、〔 〕は今補入)。

#### 第四部自然科学 Sciences naturelles.

##### I. 博物一般 Histoire naturelle.—Traité généraux.

本草綱目、本草綱目纂疏卷一、神農本草經、神農本草經〔別本〕、本草綱目啓蒙、大和本草、大蘇本草記聞、本草正譌、質問本草内篇、紹興校定本草画、物品目録……………〔以上11部〕

##### II. 植物学 Botanique.

大和本草諸品図、桃洞遺筆、増補地錦抄、百品考、拾品考、陸氏草木疏図解、新訂草木図説、千草の根ざし、絵本野山草、竹洞四君子、芥子園尽伝二集、本草和名、泰西本草名疏……………〔以上13部〕

##### III. 農業、園芸 Agriculture, Horticulture.

農業全書、農家必読、成形図説、草木育種、本朝食鑑、東垣食物本草、食物和歌本草、春之七草、救荒本草啓蒙、救荒本草啓蒙〔別本〕、救荒本草、庖厨和名本草、草木栽培法、怡顔齋桜品、茶史、喫茶養生記、養蚕秘録、養蚕新論、養蚕拾遺篇、養蚕手引草、養蚕輯要補、養蚕説、花壇綱目、秘伝花鏡、花彙、四季ノ花、四季艸、日本植物図説、花壇養菊集、活花百瓶、立花錦木……………〔以上31部〕

## IV.\* 鉱物学, 化石 Minéralogie.—Fossiles.

雲根志, 貝石画譜……………〔以上 2部〕

## V. 医学 Médecine.

本草衍義, 切疔, 万法類編, 南北相法, 南北相法後編, 普救類方, 大成論, 聲麯考, 傷寒金鏡, 六物新志, 神遺方, 婦人寿草, 産科母子草, 百味主能諺解, 物品識名, 古方藥品考, 養生訓, 貝原養生訓, 長命ニナル伝, 老人養草, 和語本草綱目, 藥籠本草, 草木弁疑, 本草匯, 本草蒙全, 本草約書, 草木性譜, 有毒草木図説, 毒品便覧, 本草薬名備考……………〔以上 30部〕

以上のほか, 他の部の中に見出される書名で, 博物に関するものは次の 6部である。

## VI. 言語学, 文献学 Linguistique, Philologie.

都鳥考, 詩経名物弁解……………〔2部〕

## IX. 文芸 Belles-lettres.

貝尽浦之錦……………〔1部〕

## XI. 教育技芸 Éducatons, Arts et Métiers.

日本産物志, 日本物産志, 山海名産図会……………〔3部〕

\*

それぞれの本の内容を検討して, この分類を見ると, 不適當と思われるものが少なくない。まず, 第四部 I の「質問本草内篇」は純粹の植物図説であって, II に移すべき内容のものである。これに反して, II にある「大和本草諸品図」, 「桃洞遺筆」, 「百品考」は, I の博物一般に移すべきもの。もっとも「百品考」は考証的な記事が多く, 正確にはいわゆる名物学に属すべきものである。同じく名物学の書「詩経名物弁解」が第六部に入っていることからすれば, 「百品考」も第六部に移すのがより正しく, II の「陸氏草木疏図解」も, I の「本草和名」も第六部に入るべきものであろう。III の農業園芸

\*この項特にここに加える。

の項が最も混乱している。「春之七草」, 「怡顔齋桜品」, 「花集」, 「日本植物図説」は、いずれも純正植物学でⅡに移すべく、特に後の2書は然り。ただ「春之七草」が考証的な記文に富む。「怡顔齋桜品」はサクラの品種を記載して一見園芸書の如くであるが、「増補地錦抄」をⅡに入れるのなら、「桜品」もそちらに入れるべきであろう。また、「救荒本草」ならびにその解説書「救荒本草啓蒙」は、もともと饑饉に備えて書かれたものであるが、その内容は全く植物学的であって、これもまたⅡに移すのが妥当である。

医学の項(Ⅴ)では、「草木性譜」, 「有毒草木図説」, 「毒品便覧」が、いずれも明かに植物学的な著述で、医薬学書に分類するのは正しくない。「六物新志」は薬物にも触れているから、一応この項に載せたのはよいが、実は多分に博物学的内容である。その他のものでは、第九部の「貝尽浦之錦」は、貝の本が乏しい中で、貝の専書として博物学と見做して不当ではない。この本には蛤の左右の貝殻に、絵や、歌の上の句と下の句とを別々に書いて、遊びに使う貝合せ(かひおほひ)のことが述べてあるから、文芸の部に分類したのであろう。また、「日本産物志」を第十一部のうちのⅢ, 産業—**Industrie** に分類したのは、本の表題にとらわれたためであろうし、わが物産学と称した学問に暗かったのにもよるのであろう。この本は産業に関するものではなく、明かに純粹の地方動植物誌(**fauna & flora**)なのである。

上に列挙した図書の分類についての私見のほか、書名を見て気づくのは、Ⅱ植物学という項はあるが、動物学の項はなく、動物に関する本がほとんどないことである。江戸時代の刊本に動物に関するものが少なかったのは確かであるが、入手可能な動物に関する刊本が決してなかったわけではない。なお、Ⅱの植物学の項中にある「竹洞四君子」と「芥子園展伝二集」とは、絵画指南の書であり、これを植物学書として取扱うのは適当ではない。また、「絵本野山草」(四のⅡ)は、その挿絵が芸術的なばかりでなく、すこぶる科学的な点で、立派な植物図説であるが、この本の著者の意図は植物学の本を著わそうとしたのではない。シーボルトの「日本図書目録」(後出)では、本書を「有名な絵画の木版複製」(**Imitationes xylographicae celebrium**

tabularum pictarum.) なる項目に分類してあって、当時流行の絵入本を特別視している。同目録には、喜多川歌麿の有名な「(免挿んむしえらみ)画本蟲撰」なども、この項目に分類している。

### 3 解題略

前掲ロニの目録中から、筆者の考えに従って、応用方面のものを除いて本草博物に関するものを自由に選出し (93 部中 57 部)、簡単な校訂と注とを施す。それぞれの図書の解題はすべて原本によって正確を期し、異版もそれぞれ比較した。ロニの原文での収載の仕方は、例えば次の如くである。

救荒本草啓蒙

*Kiu-kwau hon-zau kei-mô.*

Enseignement sur les plantes comestibles dans le temps de famine.  
1842. —Cinq vol. in-8°. [N° 269.]

日本語の書名とその読みにつづいて、極めて簡略な解説、刊年、大きさ、巻数と図書番号を記載するだけで、著者名はあげない。日本語の読み方には若干の誤りが散見する。今それらを書名の習慣に従って校訂しておく。本の大きさは、原文では上例の如く、in-8°, in-4° のように示してある (octavos, quartos, …)。西洋の本と日本の本とでは大きさがちがうが、今それらをそのまま記し、わが国の用法に従って中本、大本あるいは半紙本、美濃紙版などとは記さない。( ) に入れた小字の読みは筆者が加えたものである。また、挿図は筆者が選んで補入したもので、原目録にあるのではない。

#### 第四部一 I

本草綱目, 1714. —Quarante-cinq vol. in-4°, avec figures.

刊年 (正徳 4) と巻数 (45) とから見て、(とう いのう) 稻 (稻生) 若水の「新校正本草綱目」である。これは李時珍原著の和刻本中もっともすぐれた版といわれるものである。本書は元来薬物書ではあるが、ロニが *Traité général d'histoire naturelle* と注記してい

るように、すぐれた博物学書でもあり、江戸時代のわが博物学発達の基礎になった。

本草綱目算疏卷一, 1802. —Trois vol. in-4°.

曾槃(占春)編「本草綱目纂疏」1～3巻で, trois vol. in-4° と一致する。刊記なく1802年(享和2)は序が草せられた年である。全部で20巻あることが写本で知られ, そのうち1～3巻のみ刊行。筆者はしかし巻三の刊本を知らない。巻一は水, 火, れ, 土部, 巻二は金石および石部。漢文。表題の算は纂。

神農本草経, 1854. —Trois vol. in-4°.

ロニの書目には N°609 と N°266 と2部載せている。いずれも森立之が編纂した嘉永7年(1854)の和刻本で, 「神農本草経攷異」と併せて3巻である。伝存の「神農本草経」を復原編纂した陶弘景(隠居)が, 後に注を施して「本草集注」3巻をつかったのが, 西暦500年のころである。

本草綱目啓蒙, 1847. —Quatre vol. in-4°.

小野職博(蘭山)<sup>(もといちやう)</sup>著, 弘化4年(1847)の井口望之(楽山)訂, 岸和田藩版のいわゆる「重訂本草綱目啓蒙」(本書の第四版に当る)である。これは48巻, 20冊で, quatre vol. とあるのはそのうちの4冊だけか。20冊本は4冊に合本できる程度の嵩ではないからである。本書は「本草綱目啓蒙」と題し, 「本草綱目」の解説書のようにあるが, 実は蘭山自身の創説に富み, 江戸時代の博物学書中最も出色のものである。本文は和文。

広大和本草<sup>(こうやまとほんぞう)</sup>, 1759. —Quatre vol. in-8°.

直海龍(元周)<sup>(なおる)</sup>著, 宝暦9年(1759)版, 10巻附録2巻合4冊(流布本は12冊)。ロニの注に, Grand traité d'histoire naturelle du Japon. とあるのは, 本書の解説にはならず, この評はむしろ上出「本草綱目啓蒙」についていうべき言である。「広大和本草」が濫作の甚だしいもので, 世を誤ることが大きいことについては, 上野<sup>7)</sup>を参照。本文は和文。

大蘇本草記聞<sup>(たいそ)</sup>, 1873. —Quatre vol. in-8° (Ms.).

貝原篤信(益軒)の「大和本草」(後段参照)をテキストとした講義の筆録。講述者は不明なるも小野蘭山あたりか。1873年は明治6年であるから, この年にできたものでなく, この年の写本であろう。原文に Tai-yaku hon-zau ki-bun とあるのは, Tai-kwa hon-zô ki-bun と読むべきで, ヤクは龕である。蘇はクワまたはワ, 和の古字で, 「大和本草」を殊さら「大蘇本草」と書いたものであろう。本文は和文。

本草正譌, 1776. —Six vol. in-8°.

尾張藩の儒, 松平秀雲(君山)が著, 安永5年(1776)刊, 12巻6冊。原文の Hon-



zau sei-gi は sei-kwa でなければならない。本文は和文。

質問本草内篇, 1837. —Cinq vol. in-8°.

琉球, 呉継志著, 南方諸島植物図説として出色のもので, 図も科学的。内篇 Cinq vol. とあるのは, 何かの間ちがいで, 5冊に製本してあるのでそうしたのであろう。

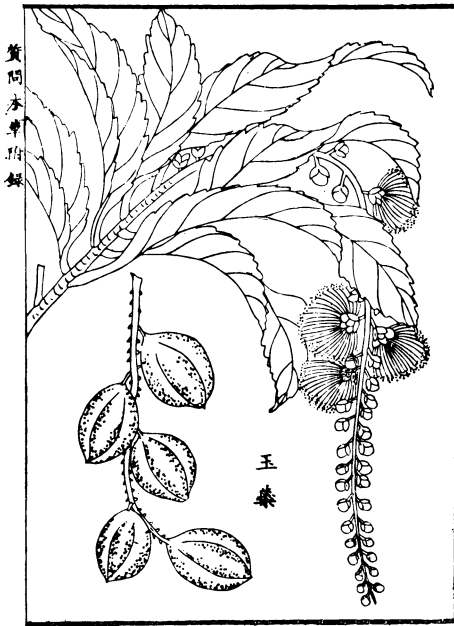


図1. 「質問本草」附録の挿図の一(10丁おもて)。熱帯地方の海岸の小川畔に生育しているサガリバナ (*Barringtonia racemosa* ROXB.) で, その穂状花序, 四稜ある果実などよく描いてある。日本列島では, 沖縄から奄美大島まで分布し, 10丁裏の記文には, 玉薬, 大島土名サガリバナとあって, 奄美大島に産することを示している。中程度の高木である。

内篇4巻, 外篇4巻, 附録1巻計9巻で, 天保8年(1837)の刊行である。著者呉継志はその人があるのではなく, 仮托の人物であらうといわれる。漢文。

紹興校定本草画, Dix vol. in-4°.

南宋の紹興年間(12世紀)に, 王継先らが編纂した「紹興校定經史証類備急本草」, 略して「紹興本草」の絵図の部分で, 中国では失われ日本にのみ現存。ロニの書目に載ったのはどのような写本か不明であるが, 世上に伝写尠く全く稀観に属する。筆者は数本を見ているが, その比較研究が望まれる。昭和8年に春陽堂が白井光太郎博士本を影印した6冊本がある。

物品目録, 1728. —Deux vol. in-4°.

後藤光生(黎春)の著, 「本草綱目補物品目録」が正しい書名で, 「本草綱目」以外の群籍に出ている物品名を集め, その出所を記し, 且考証を加えたもの。2巻2冊

(または合1冊), 宝暦2年(1752)刊。上記1728年(享保13)は, 自序が草せられた年である。漢文。

## 第四部一Ⅱ

大和本草諸品図, 1709, 1788, 1715, in-8°.

「大和本草」は貝原篤信(益軒)の著で, 日本で最初の動植物誌。序目, 16巻, 附録2巻, 諸品図すなわち動植物の図2巻, 合計20巻, 10冊本または20冊本がある。1709(宝永6), Cinq vol. in-8°は10冊本, 1715(正徳5), un vol. in-8°とあるのは諸品図のみ。1788, un vol. も諸品図のみであろうが, 筆者はこの天明8年版を知らない。いずれも半紙版(中本)で, 諸品図だけを分離購入することができたものと思われる。本文は和文。

桃洞遺筆, 1833. —Trois vol. in-4°.

紀州の本草家小原良貴(桃洞)の動物についての観察記録を, その没後彼の孫小原良直(蘭峽)が編集したもの。1833年(天保4)にその第一輯3巻が刊行された。第二輯3巻は嘉永3年(1850)に出ていたが, ノールデンシエルドは入手できなかったらしい。和文。

増補地錦抄, 1733. —Vingt vol. in-16.

江戸, 北染井の伊藤伊兵衛著, 園芸植物の図と記文とよりなる小本で, 「増補地錦抄」8冊, 宝永7年(1770)刊, 「広益地錦抄」8冊, 享保4年(1719)刊, 「地錦抄附録」4冊, 享保18年(1733)刊, 全20冊。上記1733, Vingt vol. はこれに一致し, 刊年は享保18年を採ったのである。和文。

百品考, 1853. —Six vol. in-4°.

著者は京都の儒医山本世孺(亡羊)。動植物100種を自由に採録し, 品評考証したもので, 第一編2巻が天保10年(1839)刊。1853(嘉永6)に三編まで全6巻が公刊された。漢文。

<sup>(しやうひこう)</sup>  
拾品考, 1761. —Un vol. in-4°.

長崎の野田青霞の著, 舶来植物10種, すなわち, 藤蔓相思子, 鳳梨, 金毛狗背,<sup>(マツシロ)</sup> 麻林度,<sup>(にくづく)</sup> 丁香樹,<sup>(きんじこ)</sup> 肉豆蔻樹,<sup>(センテ)</sup> 蜜産山慈姑, 大葉旃那, 莫斯箇末亞那, 紅豆樹の記文と, 石峯融済の画の木版色刷とよりなる。本書は当時このような珍奇な海外植物が, 長崎に舶来したことの記録として重要なばかりでなく, 美しい木版画が好事家に珍重せられた。嘉永3年(1850)の序があるが, 刊年の明記なく, 1761は何を指したのかわ不明。本書とは別に, 小野蘭山の「十品考」(「蘭山先生十品考」, 寛政10年(1798)刊)

があるが、ロニの注記に、*Examen de toutes les espèces de plantes; avec figures coloriées.* とあるので、青葙の色刷本なることが明かである。

陸氏草木疏図解, 1779. —Cinq vol. in-4°.

安永8年(1779)版, 「陸氏草木鳥獸蟲魚疏図解」である。4巻附録1巻, 計5巻。

新訂草木図説, 1856. —Vingt vol. in-4°.

飯沼長順(愨齋)著, 田中芳男, 小野職<sup>(もとよし)</sup>愨新訂の明治8年(1875)版の「草木図説草部」第二版で, 20巻。上記1856は安政3年で初版の刊年であり, 新訂版の刊年ではない。和文。

千草の根ざし, Un vol. in-4°.

「枕草子」に出ている草木20種を考証したもので, 岩崎常正の草木写生図10丁を附す。著者殿村常久は本居宣長の門人である。文政13年(1830)刊, 1冊本。和文。

絵本野山草, 1755. —Cinq vol. in-8°.

絵画による植物の本で趣味を目的としてはいるが, その絵図の科学的なことにより, 植物図説として十分の価値がある。画は浪華の橋保国。宝暦5年(1755)刊, 5巻。求版による文化3年(1806)版が世上に流布する。和文。

本草和名, 1796. —Deux vol. in-4°.

深根輔仁が10世紀の初頭に著したもので, 薬物の漢和对訳名集である。江戸時代に幕府の文庫中で発見せられ, 寛政8年(1796)に多紀元簡が序を付して刊行した2巻本である。ロニの書目に, *Hon-zau wa mei* とあるが, これは *wa-myô* と読むべきである。漢文。

泰西本草名疏, 1829. —Trois vol. in-8°.

伊藤圭介著, 文政12年(1829)刊。ツェンペリーの「日本植物誌」(THUNBERG, C. P.: *Flora Japonica*)より植物名を抄出し, それに和名と漢名とを附記したもの。その附録に, リンネの二十四綱分類式を紹介し, 生物分類の基本を種(species)なる概念におくことを示した劃期的な著述。附録とも全3巻。本文は和文, 欧字ならびにツェンペリーの肖像画入。

#### 第四部一Ⅲ

<sup>(せいけいへつ せつ)</sup>  
成形図説, 1804. —Trente vol. in-4°.

薩摩藩の本草学者曾榮(占春)が, 国学者白尾国柱と協力編集した大部の著述中の

30巻で農事から菜蔬に到る。文化2年(1805)刊、薩摩藩版。1804は不明。和文。稀に挿図色刷版がある。

草木育種<sup>(そだてぐさ)</sup>, 1818. —Quatre vol. in-4°.

岩崎常正(灌園)著, 文化15年(1818)刊。花卉の培養法を述べたものであるが、その中に13種の害虫を図示し、博物学上も注意すべき書。和文。

本朝食鑑, 1695. —Sept vol. in-8°.

小野必大(千里), また野必大が著, 元禄8年(1695)刊, 12巻10冊。または12冊。飯食物を漢文で記述したものであるが、その中の動植物の形態および生態の記述がすぐれ、立派な博物学をなしている。

東垣食物本草<sup>(とうえんしよくもつほんざう)</sup>, 1651. —Huit vol. in-4°.

元の李杲(東垣)撰, 「食物本草」の和刻本, 慶安4年(1651)刊, 10巻, 附「日用本草」(元の呉瑞の輯)2巻, 全8冊。この和刻本は世上流布するもの稀。中国古代の食医の制度の遺風を伝えるいわゆる食物本草の代表書。和刻本は稀観。

食物和歌本草, 1737. —Trois vol. in-4°.

京都の山岡元隣<sup>(じやうん)</sup>(而盥齋)著, 元文2年(1737)版。「食物和歌本草増補」7巻は寛文7年(1667)刊。いずれも中国の食物本草の流れを汲むもの。ロニの注に, avec figures とあるが, 筆者は挿図のある本を知らない。和文。

春之七草, 1800. —Un vol. in-4°.

原著は春之七草ではなく, 「春の七くさ」と題する。曾槃(占春)の著, 図入, 寛政12年(1800)刊。和文。

救荒本草啓蒙, 1842. —Cinq vol in-8°.

「救荒本草」(次に出す)をテキストとした講義の筆録, 講述者は蘭山の孫小野職孝<sup>(もとたか)</sup>(蕙叡)である。天保13年(1842)の刊行である。「救荒本草啓蒙」14巻と, 「救荒野譜啓蒙」2巻, 合5冊。ロニの書目には N°269 と N°218 と 2部ある。和文。

救荒本草, 1799. —Neuf vol. in-8°.

明の徐光啓編, 14巻, 明の王盤輯「救荒野譜」2巻, 9冊, 刊年の1799(寛政11年)から推測して, 中国版ではなく, 小野蘭山校訂の「校正救荒本草」, すなわち和刻本である。もと, “饑饉の際食べられる植物”(plantes comestibles dans le temps famine)を述べたもので, 「野譜」の方は植物の図であるが, 「本草綱目」とは別の趣がある植物の本なので, 江戸時代の博物学者の尊重するところとなった。

庖厨和名本草, 1684. —Cinq vol. in-8°.

向井元升著「<sup>(ほうちゆうびようわみやうほんぞう)</sup>庖厨備用倭名本草」13巻13冊で、貞享元年(1684)の刊行。動植物の食品400余種を記述したもので、前出「本朝食鑑」同様、食物本草の流れを汲むもの。本文は和文。

草木栽培法, 1876. —Quatre vol. in-8°.

「菓木栽培法」の誤記。藤井徹著、明治9年(1876)刊、7巻、色刷木版の果樹の附図1巻。菓木は現在の用字では果木。和文。

<sup>(いがんさいおうひん)</sup>怡顔齋桜品, 1805. —Un vol. in-16°.

岡岡成章(恕菴また怡顔齋)撰。桜の品種の図説、宝暦8年(1758)刊。内題「桜品」。上記1805(文化2年)版の有無を筆者は知らない。数版あることは確かである。小本。ロニの書目に、*Tai-gan-sai Au-hin* とあるのが *I-gan-sai* とあるべきである。和文。

花壇綱目, 1716. —Trois vol. in-8°.

3巻、水野元勝著、享保元年(1716)刊、花卉の花期、栽培法等を記述する。和文。

秘伝花鏡, 1829. —Six vol. in-8°.

清の<sup>(かう)</sup>陳漢子(扶揺)の著、文政12年(1829)版は平賀源内(鳩溪)が校正した和刻本で、「重刻秘伝花鏡」と題し、6巻、絵入。「救荒本草」や「本草綱目」とは別の趣のある動植物の本として、江戸時代に広く読まれた。ロニの書目に、*Hi-den hana Kagami* とあるのは、*Hi-den kakyô* と読むべきである。

花彙, 1765. —Huit vol. in-4°.

全8巻中、草部4巻が島田充房、木部4巻が小野蘭山の手になり、草木200種を収載、明和2年(1765)の刊行。18世紀における代表的な刊本植物図譜で、図も科学的で優秀である。本文は和文。仏人サバティエ(L. SAVATIER)による本文のみの仏訳(*Botanique japonaise. Livres Kwawi. Paris, 1873, 8vo, 156pp.*)がある。

日本植物図説, 1874. —Un vol. in-4°.

伊藤圭介著、草部イの部、初編、1巻1冊、明治7年(1874)刊。サバティエの仏文の序を載せる。この書は計画があまり大き過ぎ、この1冊を世に送っただけに終わったのは惜しい。和文。

花壇養菊集, 1712. —Trois vol. in-4°.

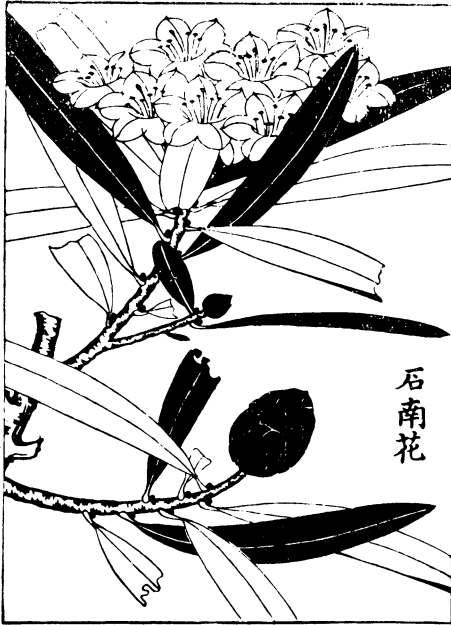


図2. 「花彙」, 木之三, 10  
丁おもてにある挿図。

シヤクナゲ(ホンシヤクナゲ,  
*Rhododendron Mitternichii*  
SIEBOLD et ZUCCHARINI)

である。記文に「石南花<sup>シヤクナゲ</sup> シ  
ヤクナギ, (前略) 四月枝梢<sup>コダヘ</sup>  
ニ花サク, 数十集り生ス, 粉<sup>モモ</sup>  
紅色筒子六出, 形子<sup>イロ</sup>蘭羊花ニ  
似タリ, 大サ寸余, 頗ル榮観  
ニ堪タリ。」 牧野富太郎博士  
は石南をシヤクナゲに当てる  
のは誤りだとする。

志水閑事著, 正徳5年(1715)刊。菊の種類および培養法を述ぶ。小横本。和文。

#### 第四部—IV

雲根志, 1773. —Six vol. in-8°.

木内重暁(石亭)著, 石の書なるも, 化石を載せることが多いのでここに収録する。  
前編安永2年(1773), 後編安永8年(1779), 三編享和元年(1801)刊。和文。

貝石画譜, 1725. —Un vol. in-16.

湊園子の著, 化石の図譜(木版画), 1巻, 刊記なく, 上記1725は不詳。化石だけ  
の専書として希本。和文。

#### 第四部—V

本草衍義<sup>(老人著)</sup>, 1818. —Trois vol. in-4°.

宋の寇宗奭撰の和刻本, 3巻, 文政6年(1823)の序がある。1818は不詳。

普及類方<sup>(海老ゆうらいぼう)</sup>, 1729. —Trois vol. in-8°.

林良適、丹羽正伯纂輯、「官刻普及類方」、7巻12冊、享保14年(1729)刊。諸病の手当法および用いるべき薬物を平易に説いたものであるが、巻之七薬品図解が植物および動物の図説をなし、その図も決して悪くない。植物55、動物6、鉱物3種。和文。

<sup>(しょうしやこう)</sup>  
聲麿考, 1859. —Deux vol. in-4°.

大淵常範(棟菴)の著, 6巻と附録, 2冊、安政7年(1860)刊。上記1859は成稿の年。ジャコウジカについての考説をまとめたもの。本文は和文。

<sup>(ろくぶつ)</sup>  
六物新志, 1786. —Trois vol. in-8°.

大槻茂質(盤水)著, 天明6年(1786)刊。2巻。一角, 泊芙藍<sup>(ワニコール)</sup>(<sup>(オブラン)</sup>), 肉豆蔻<sup>(にくぶく)</sup>(<sup>(ミイラ)</sup>), 噶蒲利哥<sup>(エブリゴ)</sup>, 人魚, の六物について蘭書に従って述べたもの。ロニの書目の Riku butu は Roku butsu と、普通に読むべきであろう。漢文。

物品識名, 1809. —Deux vol. in-12; 1825. —Deux vol. in-12.

邦産の動植物および鉱物およそ4,000の和漢名を対出させ、イロハ順に配列した名彙で、小本ではあるが博物学上の重要著作。文化6年(1809)刊, 2巻, 文化8年(1811)同拾遺2巻刊。1825年の版本については筆者は知らない。

古方薬品方, 1842. —Cinq vol. in-8°.

内藤尚賢(蕉園)著, 「増補古方薬品方」5巻5冊, 天保13年(1842)刊。古方に出ている薬品について述べたものであるが、科学的な動植物図を挿入し、博物の書としても見るべき内容のものである。これは尾張学派の特徴で、薬品を取扱っても博物学の色が濃いのである。漢文。

和語本草綱目, 1698. —Dix vol. in-8°.

岡本為竹(一抱子)著, 「図画和語本草綱目」, 一名「広益本草大成」, 23巻5冊(あるいは10冊)。元禄11年(1698)刊。薬物書。和文。

薬籠本草, 1734. —Six vol. in-8°.

香月啓益(牛山)著, 享保19年(1734)刊, 6冊。薬物書。

<sup>(くわい)</sup>  
本草匯, 1666. —Dix vol. in-8°.

清の郭宜章(佩蘭)著の和刻本, 序目, 図, 18巻, 附補遺, 元禄6年(1693)刊。1666については不詳。原本は順治年間(1644—1661)刊。ロニの書目に、Hon-zau gwai とあるが、これは Hon-zô Kwai でなければならない。

本草蒙全, 1565. —Quatre vol. in-8°.

明の陳嘉謨輯「本草蒙全」12巻。全は蒙。この本については、筆者はまだ和刻本の

有無を確かめる機会を得ない。

本草約書, 1660. —*Quatre vol. in-8°*.

約書は約言の誤記。明の霞己の「薬性本草約言」の和刻本。4巻, 万治3年(1660)刊。

草木性譜, 1827. —*Trois vol. in-8°*.

名古屋の清原重巨の著, 3巻, 文政10年(1827)刊。純植物学的著述で, 図も科学的, 前述のように尾張学派の特徴を示したものである。本文は和文。図の色刷本がある。

有毒草木図説, 1827. —*Deux vol. in-8°*.

「草木性譜」の続編ともいふべき, 有毒植物を集録し図を挿入したもの。清原重巨著, 文政10年(1827)刊, 2巻。本文は和文。

毒品便覧, 1878. —*Un vol. in-16*.

小野職愨(もとよし)撰, 有毒植物ポケットブック。色刷木版の挿図を載せる。1878年(明治11)版は第一集のみ。第二集は1882年(明治15)に出たから, ノールデンシエルド来日の時にはまだ第一集だけであった。書名の「毒品便覧」は内容を示すのに適当ではなく, むしろ, 明治16年(1883)刊の介知精三撰の同様の内容の「植物毒品便覧」の表題の方がわかりやすい。和文。

本草薬名備考, 1678. —*Trois vol. in-12 oblong*.

丹波頼理著, 小横本9巻, 8冊, 延宝6年(1678)刊。和文。本書には天保2年(1831)版の山澄延年校の「校訂本草薬名備考和訓鈔」7巻がある。

#### 第四部—VI

都鳥考, 1815. —*Un vol. in-4°*.

北野(梅屋)鞠塙の撰, 1巻, 文化12年(1815)刊。ミヤコドリに関する故事来歴を集めて考証したもの。鞠塙は角田川〔隅田川〕向島百花園主。ロニの書目に, *toteôko* (トチョウコウの意) とあるのは, *miyako-dori kô* と読む方がよい。和文。

詩経名物介解, 1731. —*Duex vol. in-4°*.

江村如圭著, 享保16年(1731)刊。詩経中の動植物を解説したもの。和文。

#### 第四部—IX

貝尽浦之錦, 1751. —*Deux vol. in-4°*.

大枝流芳著, 2巻3冊, 寛延4年(1751)刊。著者は香道家。貝の刊本の稀な中で



本書は重要著述の一といえるが、著者の意図は趣味的で、ロニが本書を文芸の部に分類したのは、歌仙貝等の記事があるためであろう。和文。

#### 第四部—XI

日本産物志, 1871. —Deux vol. in-8°.

N° 1034 の「日本産物志」、N° 822 の「日本物産志」1872 とは同一シリーズのものであろう。伊藤圭介著「日本産物志」は全部で11冊あり、書目の注には、*Notices sur les produits des deux provinces Yamasiro et Mousasi.* とあるから、山城の部2冊と武蔵の部2冊を指すものであろう。しかし、ともに1873年(明治6)の刊行で1871と合わない。「日本物産志」とある方は、産物志の誤記なるべく、上記二ヵ国以外のどれかであろう。和文。全11冊の内容は、山城上下、近江上下、武蔵上下(以上明治6年刊)、美濃上中下(明治9)、信濃上下(明治10)である。

山海名産<sup>(つゑ)</sup>図会, 1798. —Cinq vol. in-8°.

部<sup>(しどめ)</sup>関月(法橋)著、寛政11年(1899)刊、5巻。山海の名ある産物の産状、採取法、加工等を絵入で説明したもの。和文。

### 4 シーボルト蒐集日本書籍目録との比較

シーボルト(Philipp Franz von SIEBOLD)が日本滞在中(1823—1830)、蒐集した525冊の書籍および手稿(ヘーグ王立博物館所蔵)の目録が公にされていて、われわれに多大の便宜を与える。これはライデンで1845年(弘化2)に125部印刷せられた<sup>8)</sup>。ロニの書目の出版に先だつこと38年である。シーボルト、ロニ両書目に現われた本草図書を比較して、ヨーロッパ人の眼に触れたであろう、この種の日本図書を概観しよう。

シーボルトの書目は、「日本書籍及手稿目録」と題しているように、手稿本に富み、その分類の方法も独特で、Bb, 植物学的写生図(手稿), Bc, 動物学的写生図(手稿), Bd, 雑論文という項が設けてあること、次の通りである。

Sectio III. Libri physici.

A. De historia naturali generales.

- a. Sinici denuo in Japonia impressi. ……194-206.
- b. Japonici. ……207-223.
- B. De historia naturali speciales.
  - a. Monographie botanicae ac zoologicae. ……224-247.
  - b. Adumbrationes botanicae, MS<sup>tae</sup>. ……248-265.
  - c. „ zoologicae, MS<sup>tae</sup>. ……266-283.
  - d. Dissertationes miscellaneae. ……284-293.

また、博物一般 (A) を中国の書物の日本で再刻されたもの、すなわち日本版 (a) と、和書 (b) とにわけたのは、当を得た仕方である。前節で筆者はこの Aa に属するノールデンシェルドの本を、すべて和刻本と書き示した。本草和刻本の若干については、筆者にその書誌学研究があり、いづれ別文で発表したい。シーボルトとロニとの分類を比べてみると、博物一般の項を設けることで一致しているが、ロニには植物学はあるが動物学がない。シーボルトでは、動植物の刊本を併せて 1 項とし (Ba), 手稿本 (Bb, Bc) と分けてルいる。次に比較のためにロニの分類を掲げる。

Quatrième Section.—Sciences Naturelles.

- I. Histoire naturelle.—Traité généraux.
- II. Botanique.
- III. Agriculture.—Horticulture.—Traité généraux.—Arboriculture.—Floriculture.—Thé—Vers à soie.
- IV. Minéralogie.—Fossiles.
- V. Médecine.—Pathologie.—Hygiène.—Matière et nomenclature médicales.

筆者が自由に選出した本草博物書 (刊本のみ、稿本と写本を除く) は、ロニの書目から 58 部 (前節を見よ)、シーボルトの書目から 56 部で、選出後くらべてみると、その数は大体伯仲している。農業養蚕等は除いてある。これららを刊行年次別に分類してみると、次の通りである。

1700以前	1701-1750	1751-1800	1801-1850	1851以後	計	書目
4	9	22	21	0	56部	SIEBOLD(1845)
8	10	13	18	9	58部	ROSNY (1883)

シーボルトの書目にあるもので、ロニにも出ているものが23部、反対にロニにあつてシーボルトにもあるものが19部である。シーボルトに1830年以後出版のものが無いのは、彼の離日後のことで当然であるが、試みにロニから1830年以降のものを拾い出すと14部に達する。その中には「質問本草」(1837)、「新訂草木図説草部」(1874)のような、海外に示してわが植物学の進歩を誇るに足るものがある。同様の価値(内容のオリジナリティの点では上記2書に劣るが)ある「泰西本草名疏」(1829)は既にシーボルトに載っている。恐らく新刊直後であつたであろう。また、シーボルトにあつて、ロニに載らないもののうち、「物類品隲」(1763)、「草木奇品家雅見」(1827)、「鯨志」(1758)などは、わが博物学の進歩を示すに耐えるもので、ノールデンシェルドが入手し得なかつたことが惜しまれる。なお、シーボルトの蒐集中には手稿本で注目すべきものが多いが、ここでは論外とする。

両書目を比較検討して知られることは、それらの時代に入手可能であつたものを一通り網羅し、両人の来日時に、17、18世紀の刊本の入手できるものが、なおかなりあつたことである。しかし、わが生物科学の進歩を示すものとして、その蒐集中には是非あつて欲しかつたものがある。ロニの書目に、宇田川榕菴の「理学入門植学啓原」(1833)が見えないことなどは、その著しい例である。この書は、わが植物学の濫觴で現今でも時々古書市場に現れるくらい、かなり多くの部数が流布したと想像せられる。同じ著者の化学の書「舎密開宗」(1845)とともに、わが自然科学の独立を促した重要著作なのである。これらをノールデンシェルドが蒐集に際して意識的に除いたとは考えられない。たまたま、書肆に見当らなかつたのであろうか。

## 5 ロニ書目の生物学史的意義

ロニの書目に載せた本草博物ならびに医薬学に関する図書93部、そのうち純粋博物学(純粋植物学と見做せるものを含む)、ならびにそれと深い関係あるものは計57部である。わが本草図書全体から見れば、これは九牛の一毛に過ぎない。それらが、しかし、わが生物科学を海外に示すのに、何らかの

役割を果たしたであろうことはもちろんであろう。それらを研究することの意義は、ヨーロッパの学者達がそれらの図書をどう受取り、それによってわが生物科学をどう理解評価したかにある。日本の本草博物学書は、シーボルト、ノールデンシエルドの蒐書に限るわけではなく、欧米各地の公私の文庫に数多く所蔵せられ\*、それらが欧米の学者達の何らかの注意を惹いたことと想像せられる。しかし、欧米人の手になる生物学史書の中に、それらの図書を駆使して、日本の生物科学の歴史に章節を与えたものを絶えて見ないのは、言語の障壁があるとはいえ、遺憾である。その中で、1882年（明治15）、当時北京のロシア公使館付医官であったブレットシュナイダー（E. BRETSCHNEIDER）が、その著、*Botanicon Sinicum* の中に1節を設けて、日本の薬物学および植物学の歴史を書き、ロニの書目にあるのと同じ本草図書のいくつかにも触れているのが注目される<sup>9)</sup>。近年では、プラント（Wilfrid BLUNT）が植物学的挿図を論ずるに当り<sup>10)</sup>、「花彙」、「本草図譜」、「草木図説」などを取り上げ、特に「草木図説」からはスズランの図を転載し、その葉の表裏を黒白で表現する描法の木版画に注目している。この描法はわが本草学者の創案らしく、第3節にあげた石南花の挿図（1765刊）に既に見られる通りである（図2参照）。

ノールデンシエルドの蒐書と直接の関係はないだろうが、さきに解題した本草図書に触れることの多いのは、デイッキンス（F. V. DICKINS）の論文<sup>11)</sup>であろう。この論文は江戸時代におけるわが植物科学の発達を述べて、すこぶる要を得ているが、その文中には誤りが少なくない。この論文の成立には、デイッキンスが当時イギリスに滞在、植物学の研究中であった伊藤篤太郎\*\* から受けた助言が与って大きい力があつたと思われるふしとその文

\*筆者はかつてウプサラ大学図書館で「本草図譜」の見事な色彩写本を見たことがある。後出のデッキンスもその文から察すると自己の蔵書中にわが本草書がいくつかあつたらしい。なお、BARTLETT<sup>12)</sup>参照。

\*\*1884—87年英国に留学。1865年（慶応元年）生。伊藤圭介の孫、後理学博士、東北帝国大学講師。教示を煩わした、東北大学教授元村勲博士に深謝する。

中にある。ディッキンス論文には、「本草綱目」、「大和本草」、「花彙」、「本草綱目啓蒙」、「本草啓蒙名疏」、「泰西本草名疏」、「草木図説」（新訂版）、「本草図譜」、「日本植物図説」の9部について評論している。このうちで、「本草啓蒙名疏」と「本草図譜」（岩崎常正著）の2書以外は、すべてロニの書目に出ているものである。

本篇の冒頭に述べたように、海外に存する日本の生物科学図書の研究は、(i) それ自体書誌学的興味があるばかりでなく、(ii) 海外学者の日本生物学に対する理解の程度を推測するために、必要な手段である。この第二の点については、別文でなお詳しく論述することを期したい。

〔附記〕 本文脱稿後、パートレットらの著書<sup>12)</sup> を入手し、ノールデンシェルドの図書蒐集についての、筆者の想像が当たっていたことを知った。ノールデンシェルドはまず横浜で図書を集めようと試みたが、当時の該地はまだ新開地でその目的を果たすことができなかった。そこで、当時、横浜在住のオランダ人科学技術者ヘールツ(A. G. GEERTS)の助手に頼んだ。その若い日本人 OKUSHI (大串?) は、横浜東京間を往復し、東京で図書を蒐めた。ウェガ号が横浜出航後は、大串は京都へ派遣されて図書購入に努力し、それを神戸に持参し、ウェガ号の横浜からの来港を待って引渡したのだということである。従って、書肆でノールデンシェルドが自ら図書の選択に当たったことは、ほとんどなかったと見てよさそうである。

## 引用文献

1. UÉNO, M. (1964). The western influence on natural history in Japan. The Centre for East Asian Cultural Studies, Tokyo: Acceptance of Western Cultures in Japan from the Sixteenth to the Mid-Nineteenth Century, pp. 81-105. (also in: Monumenta Nipponica, vol. 19, 1964, nos. 3-4, pp. 80-105, Sophia University).
2. DE ROSNY, Léon (1883). Catalogue de la Bibliothèque Japonaise de Nordenskiöld. 8vo, Paris.
3. 上野益三 (1965). 日本科学技術史大系, 15, 生物科学, 第1章, pp. 17-53.
4. NORDENSKJÖLD, A. E. (1881). The Voyage of the "Vega" round Asia and Europe. (Translated into English by A. LESLIE), 2 vols., 8vo, London.
5. 江崎梯三 (1933). "Vega" の北氷洋探検, 植物及動物, vol. 1, pp. 251-255.
6. 上野益三 (1960). 日本学士院編: 明治前日本生物学史, 第1巻, pp. 562-564.
7. 上野益三, 上掲 (6), p. 159.
8. DE SIEBOLD, Ph. Fr. (1845). Catalogus Librorum et Manuscriptorum Japonicorum. Rugduni-Batavorum, vi+35+10pp. (Impressa CXXV Exempla).
9. BRETSCHNEIDER, E. (1882). Botanicon Sinicum. Notes on Chinese Botany from Native and Western Sources. London, 228pp. (Jour. North-China Branch of the Royal Asiatic Soc., vol. 16, 1881).
10. BLUNT, W. (1950). The Art of Botanical Illustration. The New Naturalist, London, 304pp.
11. DICKINS, F. V. (1887). The progress of botany in Japan. Jour. of Botany, vol. 25, pp. 147-148. [この全文ならびに校注は, 上掲 (3), pp. 21-23 に収載]。
12. BARTLETT, H. H. and Hide SHOHARA (1961). Japanese Botany during the Period of Wood-block Printing. Los Angeles, DAWSON'S Book Shop, vi+271 pp. [ノールデンシエルドの図書蒐集, p.12-13]。